
まじょでし！

筈太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじよでし！

【Nコード】

N0689Q

【作者名】

筍太郎

【あらすじ】

やあ、どうも。

鷺旗梨紅だ。

ん？

お前は本編に出てないだろうって？

うるさいな、本編に出てないからこそココにいるんじゃないか。

それに次回作はボクが……

なんだい作者君？

ボクの話はどうでもいい？

とにかく今回の宣伝をしろと？

……まったく、キャラ使いの荒い作者だな。
で、まあそうだな。

この話は鍊磨君と萌恵君の出会いの話でね。

まあ『ボクたち』と関わりのない生活を送っていた鍊磨君がいか
にして『こっち側』の人間になったのかって話でもあるな。

……ん？

『ボクたち』とか『こっち側』とかの意味が分からないって？

ふふっ、面白いことを言うな、キミは。

……知りたかったら、読めばいいんじゃないのかい？

序章

「……天気予報大当たり、か。」

それは、真夜中の出来事。

ほつかされんま
帆司錬磨は、曇った夜空を見上げて呟いていた。

「……はあ。」

彼は残念そうにため息をつくが、それでなにかが変わるわけではない。

そのまま、錬磨はとぼとぼ家に戻ろうとして……

その時。

突然、錬磨の背後を閃光が突き抜けたのだ。

「……へ？」

慌てて振り向いてみるが、もうそこには何もなく。

「……気のせいかな？」

よく考えてみれば、こんな真夜中にこんな細い路地を通るようなものがあるはずはない。

そう自分を納得させた錬磨は今度こそ家に入ろうと踵を返し……

「ひえっ!？」

今度は、声が聞こえた。

「……?」

どうせまた気のせいだろうと思いつつも、やはり気になった錬磨は首を巡らせて声のもとを探り……

「……っ!？」

絶句した。

なぜなら、そこにあったのは彼の常識を軽く越えたものだったから。具体的に、言うならば。

……箒にまたがって空を飛ぶ女の子が、自分に向かって突っ込んでくる光景。

(……ええっ!?)

錬磨が心の中で悲鳴をあげた直後、衝撃が炸裂して。
そこで、錬磨の意識は途切れたのだった。

そして……これこそが全ての、始まりだったわけである。

第一章

「う……うん？」

鍊磨が目を開けると、そこはベッドの上だった。

微かな頭痛を感じながらも身体を起こしてみると、どうやら自室らしい。

「……夢オチ？」

なんか突然箒に乗った女の子に激突されるという理不尽な夢を見ていた気がしたが、自分のベッドで寝ているということは全部夢だったのだろう。

「はぁ……我ながら変な夢だなぁ……」

言いながら笑ってしまふ鍊磨だが、その時。

「……あれ？」

……着替えないで寝ちゃったのか。」

ふと気付いて見下ろした服は、部屋着でこそあるもののパジャマではなかったのだ。

「そういえば夢の中で着てた服もこれだったよね……」

寝汗だろうか気味悪く湿った衣服に眉をひそめながらも、とりあえず鍊磨はシャワーでも浴びてから寝ようと思い立ち。

風呂場へ向かおうと自室から出るが、その時再び違和感を覚える。

「……？」

電気、つけっぱなしだ……」

なぜかリビングも廊下も電灯に明るく照らされていて、さらには風呂場につながる洗面所の閉じた引き戸からも、光が漏れていたのだ。

「おかしいなぁ……」

首をかしげながらもともかく当初の目的を果たそうと洗面所に向かった鍊磨は、何気なく引き戸を開き……

「「……へ？」」

そして、洗面所でパジャマらしき衣服を身に付けようとしていた下

着姿の少女と見事に声をハモらせ……

「ご、ごめん！」

「す、すみません！」

まったく同時に謝罪を口に出し、やはり同時に互いに背を向けながら、後ろ手で引き戸を勢いよく閉めたのだった。

二人分の全力で閉じられた引き戸は壮絶な音をたてて枠に激突するが、顔を真っ赤にした二人にはそんなこと些末なことである。

……と。

（……あれ？

今の……誰？）

鍊磨は、ふと気付く。

この帆司家は、問答無用に鍊磨が一人暮らししている家だ。

だから、見知らぬ人間がいつの間にか上がり込んでいるなどというのは間違いなく非常事態である。

（それに……こんな時間だし……）

鍊磨が見上げた掛け時計が示す現在時刻は、午前三時。

（わけが分からない……）

一人暮らしのはずの深夜の家で、何ゆえ見知らぬ女の子が着替え中なのだろう。

鍊磨はなにやら自分がとんでもないことに巻き込まれた予感に血の気が引くのを感じ……

「あの……」

と、その時。

背後から聞こえたのは、先ほどの少女の声。

「すみません、勝手にシャワーお借りしちゃって……」

「えっ？

あつ、いや、こっちこそなんかアレで……ごめん。」

「い、いえ！

先輩に非はありませんよ！」

（……先輩？）

覗いてしまったことにはそれほど怒っていないらしいことにほっとするのもつかの間、いきなり現れた新たな謎に冷や汗の鍊磨だが、そんな時。

引き戸の開く音に振り向いた鍊磨は、そこで再び絶句する。

その理由は、単純明快。

目の前にいたパジャマ姿の少女に、見覚えがあったから。

しかも、その見覚えはつい先ほどのものであったから。

つまり……

その少女は、先ほどの夢で鍊磨に激突してきた少女だったのだ。

先ほど覗いてしまった時には当然注視などしなかったから気付かなかったが、改めて見てみれば間違いなく同一人物である。

（まさか……夢じゃ、なかった……？）

鍊磨は、否定できない不安感にそのまま声を出すことが出来ず……

「あの……先輩？」

大丈夫ですか？」

「えっ……？」

あっ、うん、全然大丈夫。」

だが、少女の心配した声にようやく我に帰り、あわてて答えを返す。

「そうですか……よかった……」

なにやらとても安心した様子でため息をついた少女だが、それから急に真顔になり。

「あの……少しお話があるんです。」

……聞いてくれませんか？」

……無論。

鍊磨に拒否する理由など、あるわけがない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0689q/>

まじょでし！

2011年1月16日01時47分発行